

---

# クロスオ - バ - ブレイク

清瞳刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クロスオ－バ－ブレイク

### 【Nコード】

N7747X

### 【作者名】

清瞳刹那

### 【あらすじ】

ここはアルハザード、そこに13歳を迎えた一人の女の子に間違えるほどに似た純粹無垢な少年が居る一組の家族が住んでいました。今、旅立とうとしている一人の少年、清瞳刹那その運命やいかに。

## 第一話：旅立ちの日（前書き）

この作品はタイトル通り色々クロスオーバーしていく作品です。

なお、主人公に関してはチートとなっておりますので苦手な方、嫌いな方等な

人がいらっしやいましたら戻るを押して下さい。

それでも見て行ってくださる方は、ありがとうございます。

色々居たらな過ぎる点があると思いますがよろしくお願ひします。

## 第一話：旅立ちの日

僕の名前は清瞳刹那

今日は僕の13歳の誕生日でこれからお祝いをするところです

「お母様？今日は僕の誕生日なのですけれど……」

不安そうに僕はお母様に聞いた

「そうよ？それがどうかしたの？刹那」

不思議そうにして聞き返してきた

「えっと、その…プレゼントは……？」

また僕は不安そうにして聞いた

「ありますよ」

「本当！」

それを聞いた瞬間僕は素直に喜べた

「ええ、でもお父様がここに帰って来てからね」

微笑みながらそう言った

「うん！ー！」

「元気に、そう返事をした」

「それまで良い子で待ってなさい」

「はい」

それから数十分過ぎて僕のお父様は帰って来た  
玄関のドアを開けて靴を脱ぎ、ゆっくりと上がって来る

「お父様、お帰りなさい」

「ああ、今日は良い子にしていたか？」

「はい、していました」

「そうか、なら今からプレゼントを発表するぞ？」

「はい！」

「それはな……」

そう言うと魔方陣が刹那の下に展開されて  
高速呪文詠唱を開始していく

「お父様、これはいったい……」

驚き少し途惑いながら、不安そうに聞いた

「君には今から三つの願いを叶えてあげよう」

「三つ？」

「そうだ」

「う・とね、一つ目は外の世界に行ってみたいし、見てみたい」

僕は数分間考えて思いついたようにそう言った

「二つ目は？」

「えっと、一番強い武器が欲しい」

「一番強い武器か・・・最強の武器で良いんだな？」

「うん」

「最後の三つ目はなんだ？」

「えっと、誰にも負けない能力・・・かな」

「決まったようだな」

安心したようにそう言った

「うん」

「お母様、これは一体・・・」

「試練よ」

「試練？」

「そう…刹那、君は今から色々な世界を旅をして、笑い、泣き、色々な人と出会いと別れたりするかも知れないけれど折れずに頑張るんだぞ？」

「はい、分かりましたでは行つて参ります」

「そうだね…まずはここかな」

そう言つと魔方阵が光だし、刹那の体を包み込んでいく

・ 僕はその時は知らなかった、この旅が大変な旅になるという事を・

## 第二話：転送そしてまた転送（前書き）

誕生日の日に唐突に始まった冒険の旅。

主人公はチ・ト能力を身に付けたようですが  
果たしてその能力を扱いきれるのか

その運命やいかに

## 第二話：転送そしてまた転送

光が僕を包み込んでから数分……  
気づいたら光が消えていて目の前に一人の男の人が船の上で立っていた……

「ここは……一体……」

僕は、辺りをよく見回した

辺りは何も無く今立っている所は壇上の魔方陣が彫られているれている場所意外は一面湖だった

「ようこそ、時空の中心の世界へ」

「時空の中心の……世界？」

「そう、ここは色々な時空の中心の世界です」

「時空？世界？」

「そうだね……例えて言えば……」

目の前に居る男の人は少し考えてこう言った

「例えて言えば……君の後ろにある二つの世界あれは月姫の世界であつちがフェイト/ステイナイト/ステイナイト世界」

「えっと、それって確か……」

確か何処かで聞いた覚えがある、月姫という世界は吸血鬼やら代行  
者やら魔術師が居る世界で、

フェイト/ステイナイトの世界が、七人の魔術師とサヴァーントが

聖杯を巡る戦争に臨む

確かこんな感じだったと思う……

「そう、今君が考えている通りだよ」

そう言った後、この世界について詳しく説明してくれた

「でも、そんな世界……作っちゃっていいの？」

「まっ、作られてしまった物は仕方ないでしょう

それにここは全ての時空の始まりとも言われているからね」

呆れたようにそう言った

「えっと、そういうえば名前教えもらって良いですか？」

「人の名前を聞くときは、まずは自分から、だよ」

そう言うと刹那のおでこに軽くでこピンをした

「いつ、えっと僕の名前は清瞳刹那です」

でこピンはそこまで痛くなかったけど反射的に一瞬声を上げてしまった

「俺の名前は柊歩だ」

「よろしくね」

「ああ」

「えっと……僕、これからどうすれば良いのかな……」

僕は少し困ったように呟いた

「ん？清瞳って旅初めて？」

「あ…うん…僕の時空ってさ…他の時空とは違って時間の流れが遅いんだ」

「へえ…まあ深くは聞かないでおくことにするよ」

「ありがとう…」

「とりあえず、あの世界に行ってみれば？」

「？」

歩が指差す先は…

「あそこ、無限闘技の世界」

「無限…闘技…？」

「そつだよ？」

「どうして？」

柊は当然のように刹那に言った

「だって清瞳って旅に出た事無いんでしょ？」

「だったらなおさらだよ自分の身は自分で守らないと」

「うん…そうゆうものなの？」

「そうゆうものなの」

「じゃあ、頑張ってみるね」

「おう、頑張ってきて」

「うん」

「あ、それと清瞳の武器はむこうで渡されると思っから」

「？」

「どうして柊さんがその事を？」

「ん・まあ君の親父さんとは昔からの知り合いでね」

少し遠い目をした

「そうなんですか」

「そうだよ」

「それじゃ、送るよ？」

「はい」

「プラグイン・清瞳刹那・トランスミッション！」

「……」

魔方阵がまた光り出し刹那を包み込み移動先に送る……

## 第二話：転送そしてまた転送（後書き）

はい、書き方が下手で困っている作者です。  
次回もお話だけで終わる予定です。  
では、また。

### 第三話・出会いそして契約（前書き）

観覧ありがとうございます。

駄作ですがどうぞ見てやって行って下さい

### 第三話・出会いそして契約

僕は今、無限闘技世界という所に来ています  
今、受付を終わらせて、  
担当の人に僕の武器が届いているということなので  
捜してもらっています

.....

「えっと…武器これ、みたいですね」

差出された武器は……

えっと、これ……

「……本？」

「はい、これは清瞳様専用の武器だそうです  
触れてみて下さい」

「う、うん……」

そう答えて、恐る恐るその武器に触れてみる

ドクン！

その武器に触れた瞬間  
なにかの鼓動が一瞬伝わって来たけど

でもすぐ収まった

「どうか、なさいましたか？」

「い、いえ……大丈夫です……」

あの鼓動は何だったのだろうか……

「再度確認します、本日より清瞳刹那様

難易度イクリプスにてご参加でよろしいですね？」

「はい」

「連続10勝されますとエキストラに挑めますのでそれに勝つこの時空から離れることが出来ます。

なお一度負けてしまいますと最初からになってしまいますのでご注意ください」

「分かりました」

その後すぐに用意された、自分の部屋に行った

.....

さっきのは一体なんだったのだろう

それにあの武器絶対、本当に武器なのかな……

確かにお父様に最強の武器を……って言っちゃったけど……

「僕……大丈夫かな……」

そう呟いた瞬間…

ガシャン!!!

机の上にあった本が落ちたのだ

『痛いさ〜』

「だ、だれ？」

僕以外誰も居ないはずなのに声が出たので、びっくりしてしまった

『聞こわ、聞こ』

辺りを見回すが人影は無く…

『違つさ、下さ下』

えっと…それはつまり、床にある物は本だけというわけで…

「本が喋った!？」

『あ〜もうっ! さっきから本、本うつさいんさ!

あたしにはねえ、ちゃんとアリスって名前があるんだよ』

しかも口悪いし…

「とりあえず、僕は清瞳刹那」

『清瞳・・・』

「どうかした？」

『いや、何でも無いのよ』

「なら……いいけど…」

『……』

「……」

『ねえ、清瞳』

「なになかな？」

『あたしと契約しない？』

「契約？どうして？」

『他の人たちの武器もそうだけど、清瞳が今触っている武器ちよつと特別製でね、契約しないと扱えないよ？』

「……わかった、契約するよ」

『よし、いい子よ』

「それで……その…契約の仕方って…？」

えっと、お父様に教えてもらった事はあるけど…

実際にやったことは無いからな…

『なんだい、そんなのも知らないの?』

「ごめん…」

『まあ、いいさ…今から契約呪文教えるからさ一発で覚えなさいよ  
ねえ?』

「う、うん」

絶対無理…

…数分後…

『どっこい、憶えたか?』

「い、一応…」

『じゃあ、やってみろ?』

「え…ええ!?!」

急展開過ぎ!?!

『そうさ、それとも無理なのかさ?』

「ち、やってみる…」

成功すると良いけど…

『それじゃあ、始めるのさ』

僕はアリスに教えてもらった通りに魔方陣を書き出して  
契約呪文を言い始めた

「我使命を受けた者なり、その契約の元我に力を貸せ!!」

闇は混沌に光は秩序に……

そして純粹な心はこの胸に……この手に力を!!!!」

そう言った瞬間刹那の魔方陣が強く光る

『契約、承認するさ』

「ふう……」

疲れた……というかまさか、このまま戦うのかなあ……  
普通に考えて、勝てない……

『お疲れ様さ、マスタ』

「ありがと」

『マスター』

「何？」

『試合の時間はどのなのさ』

「えっと…」

確か…夕方の4時頃だった気が…

ふいに時計を見た

現時刻…1時

『マスター、少し睡眠を取るのさ』

「どっして？」

『なんとなくさ』

「うん…分かった」

アリスの言った通りにベットについて眠りにこつこつとする

『おやすみさ、マスター』

「うん、おやすみアリス」

そうして僕は少し眠りについた……

## 第四話：第一回戦

「ん…ここは…?」

多分僕は夢を見ていた……

何処かの時空の海辺で夕日が沈む所だった

少し前の方で男の人と女の人が何か話している様だった

「なあ、永劫回帰を使って代償を払うのってこれで何回目だっけ？」

「なっ…まさか！使ったの!?!」

女の方はかなり驚いた様子で聞き返した

「ああ、というか状況が状況だったし使わざるをえなかった」

「あたしを呼べば!!」「あの状況で呼んでたらもつと被害が甚大だった!!!」「くっ……」

ん…?この声何処かで…それにこの人も……

「チ・トの代償か…まあ時が戻らないだけまだ、ましか…」

「じゃあまた記憶が無くなって生まれたての姿になってアルハザードに飛ぶの?」

「何時もどつりならそうだろうな、それと…いつもありがとな」

男の方は少し恥ずかしそうに言いながら女の方の頭に手を軽く置いた

「別にいい加減慣れっこさ、それにあたしはあんたの事……」

.....

『マスター!! 起きろさっ!!』

「う……うん……」

アリス……か……

『マスター!!』

「ん……アリス、どうかしたの?」

布団をはぐり僕は起き上がった

『時間さ』

「え……?」

そう言われて僕は時計を見た

現時刻、午前三時……半

『支度して出た方が良さ』

「うーん……寝る……」

そう言ってまた寝に入ろうとした

『つて寝るなぞっ!』

「によろくん…」

眠い…

『遅刻していったら相手に申し訳無しさ』

「うーん、わかったよ…」

そう言って僕は会場に行く支度をして、試合会場に向かった

## 対戦会場

メイン会場の入り口の前に立っていた

『マスター、ここに』

「ふう……行くよ、アリス」

『了解さ』

大きな扉を開けて会場の中に入って  
メイン会場に入った瞬間…

「照明凄くて少し、眩しいかな……」

天井から出てくるライトが密集して何故か僕に当たっていた  
そして何よりも……観客の多さが、観客席一杯になるほど  
埋め尽くされていた

『相変わらず、凄しさ…』

「アリスってここに一度来た事があるの？」

『えっ？いや……無い…のさ、それに来ていたとしても  
普通に考えて別のマスター…さ』

アリスは素っ頓狂な声でそう僕に返した

「うん…」

そう返事をした瞬間、観客席の上の方の多分…特別観客席だと思  
う…

そこから二人組みの男が出てきた、片方は…多分、若くて、体格  
の良く、顔立ちの良くて

多分、このこの統一者なのだろう、もう片方も同じだが、グラサン  
をかけている

次の瞬間、グラサンのかけている方が、大きな声でこう言った

「さあ始めよう……開幕の時間だ、ぞんぶんに、殺し合え」

その瞬間、会場の観客席の全員が立ち上がり歓喜の声に包まれた

さらに、その男は続けて試合フィールドに居る刹那に指をさし、こう言った

「挑戦者刹那よ、さあ頑張りたまえ」

「頑張ります」

僕は、大きな声で、そう返した

「良い返事だ、では一回戦の相手の登場だ」

そういうと、刹那の位置から反対側にある扉がゆっくりと開きそこから、いかにも強そうな大男が出てきて…

「ほお…青いな、我が名はウルト・ペルモンド」

「えっと、僕は清瞳刹那と言います」

「では………始めっ！」

そう、グラスンが言った瞬間、ウルトが即座に刹那に向かって行く

『マスターッ！』

「分かってるよっ！！」

僕はウルトが向かって来るのに対して

ウルトの方を向きながら足を引きずりつつ距離を取っていた

「逃げるか」

そう言うと刹那に向いながら手に持っている巨大な大剣を軽々と振り下ろした

「…っ！！」

刹那は手に持っているアリスを両手で持ってウルトの振りかざした剣を必死に耐えていた

「ほお…我が剣を受け止めたか、貴様何者だっ！」

「えっと、ただの人間ですけど…っ！！」

「ただの人間が我が剣を受け止めきれぬわけが無かるっ！」

「えっと…でもっ！！」

「ふんっ！！」

ウルトは更に力押しをして刹那を押し潰そうとした…が

「くっ！！…アリスっ！！」

刹那は押し潰される寸前で避けてさっきよりも更に距離をとった

『了解さっ！！』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7747x/>

---

クロスオ - バ - ブレイク

2011年10月26日15時01分発行